

令和二年度 道伝えの日 お月見歌会 入選歌

## 課題歌「月」

### 互選「一 席」

四八、最終の列車で降りぬ無人駅の引き戸を繰れば月待ちてをり

細江 和子

### 互選「二 席」

一三、手を握り「オマエ、ダレカ」と訊く母の温みくぐもる霜月の夜

谷口 茂雄

### 互選「三 席」

六、満月の明りの中を帰り来し父は刈り草山とゆらしつ

元田 鈴子

一四、放牧の牛を急き立て帰る夕山の端かすめ月のぼり来る

加藤 一誠

### 「雁部貞夫先生 推薦」

※選者評は裏面に記載

三五、月昇るテアトロロマーノに歌声の響きしことを石は記憶す

和田 操

一六、戦死せし息子の遺骨胸に抱き何を語るか月指しながら

堀 甲枝

## 自由歌

### 互選「一 席」

二四、その人を思へば歩調ゆるみたり焼香だけの葬儀の帰り

武藤 久美

### 互選「二 席」

七、空っぽの香水の瓶に閉じ込めし「初恋」という名の私の香り

三尾 幸子

四三、振り返り振り返り姉は病室へエレベーターのボタンが押せぬ

西野 紘子

### 「雁部貞夫先生 推薦」

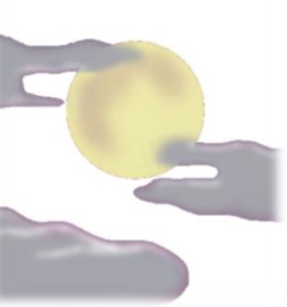
※選者評は裏面に記載

五、凜として歌会仕切りし和服形なりばさらの君を今なほ恋ふる

今野 英山

四二、静かなる白樺林を抜け出でて峨々たる山に向うよるこび

宇都木 慎一



令和二年度 道伝えの日 お月見歌会 入選歌

桐山吾朗 選

「斐太高校」 入 選

三日月に手を合わせ願う傘寿の祖母小さく丸い背なほ丸くして

一年

門前 凛音



「飛驒神岡高校」 入 選

湖を一面照らす月光はブロードウェイの舞台のようで

一年

井上 実咲

「吉城高校」 入 選

夕の月友と眺めてペダル漕ぐ田舎住まいの我等の特権  
 故郷の君と眺めた夕月夜この土手を歩きたび思い出す  
 君の目の瞳にうつる十六夜のこぼれ落ちるひとすじの涙  
 満月に君を想って瞳を閉じる想いも満ちる月が綺麗だ  
 満月の光が照らす我が心自ら光ろう新月になるまで  
 部活後の夜道を照らす月明り今日はきれいなうさぎさんだね  
 一人ぼっち満月の下蹴るボール跳ねる音のみ響く公園  
 掌ですくい上げた水に月浮かぶゆれる月を一気に飲み干す

三年 森下 明音  
 二年 薄田 結菜  
 一年 荒木 千尋  
 一年 田口 心寧  
 一年 玉腰 大輝  
 一年 林 朱莉  
 一年 松田 悠佑  
 一年 溝口 史大



※選者講評は裏面に記載



## 選評

今年の応募は、飛騨地区三高校から五十五首が寄せられ、同時期に募集される飛騨文芸祭をはるかにしのぐ応募数でした。その背景には、主題の「月」と歌数一首が確定されていて応募しやすいこと、とりわけ「月」の持つ夢想的な雰囲気や青春期の感覚とマッチして創作意欲をうながした結果かと思えます。

全応募作は、初心のおぼつかなさを含みながらも、率直に月と自分を繋いで歌い、十代の若い感覚が自在に躍動している点に惹かれました。入選とそうでない歌に差異が厳然とあるわけではなく、最後は、少し歌体が整っているとか、主題が一貫しているとかの基準で選考した結果です。

次に、選考しながら気づいた、諸君たちに共通する留意点をあげてみます。

第一は、短歌形式の五・七・五・七・七の各句の語がこま切れのように孤立して、一首としての流れがぎこちない歌になる傾向です。これでは短歌の持つ本来の抒情性（情感を訴える働き）が薄らぎ、未熟な作品として終わってしまいます。自分のこころの想いをしっかり見つめて、どう表現するかを追究するよう努めてください。

第二は、ふっと浮かんだ表現を簡単に使ってしまうことです。今回の応募歌には古典の中にある語が結構多く登場しています。「望月・有明の月・山の端・月白・雲隠れ・しづ心」などがそれで、授業で学習した古典文学が下地となっていることが伺われますが、固定観念が先行して和歌の用語を横滑りさせては、作品の色合いが混合して、フレッシュなイメージを損なってしまいます。先入観にとらわれず他の用語や言い表し方を工夫することが必要です。

第三に、自作の歌を第三者がどう読むかを想定して、歌作に向うことです。この客観性をともなわないと、用語の誤りに陥ったり、独りよがりの内容になったりしてしまいます。応募歌の中から例を挙げると、「(月明りが)輝くあの子を照らす」(前後に脈絡がなく、どういう子か不明)「一目ぼれ太陽近づいた赤い月」「夜景も似合う君の横顔」『あっち見て』建物かくれた満月だ』など、どれも理解に苦しむ箇所です。

以上の三項目は初心に起因する例と思われるので、あえて矛盾することを言いますが、一方で、これにおじ気づかず歌を作り続けることも大事です。私も歌作を始めたのは高校生のときでした。短歌が生涯の友となることを念じています。